

機関番号：21402
 研究種目：若手研究(B)
 研究期間：2008～2010
 課題番号：20730534
 研究課題名(和文) 台湾の小・中・高校教科書とナショナル・アイデンティティに関する包括的研究
 研究課題名(英文) A Comprehensive Study of Taiwan's School Textbooks and National Identity
 研究代表者
 山崎 直也(YAMAZAKI NAOYA)
 国際教養大学・国際教養学部・助教
 研究者番号：10404857

研究成果の概要(和文)：台湾の小・中・高校の人文・社会系諸教科の検定教科書を体系的に収集し、そこに表象されるナショナル・アイデンティティの分析を行った。また、最終年度においては、2000年代における教科書検定制度の定着の問題にまで研究の視野を拡大し、教科書の「制度」をめぐる政治的・社会的論争と「内容」をめぐる政治的・社会的論争がわかちがたく結びついていることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The representative of the project collected Taiwan's government authorized school textbooks of humanity and social subjects systematically and analyzed national identity representation in the textbooks. In the last year, the representative extended the target of the study and discussed the institutional aspect of Taiwan's school textbook issue. Thorough this study, a close linkage between political and social dispute over the textbook editing 'system' and that over the 'contents' of school textbooks were observed.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育社会学

キーワード：台湾、教科書、ナショナル・アイデンティティ、教育改革

1. 研究開始当初の背景

本研究の開始当初、戦後台湾の教育に関する研究は、日本のみならず世界的に見ても、比較教育学及び1990年代以降急速な発展をたどってきた地域研究としての台湾研究の双方で、「未踏の山脈」と形容すべき状況にあった。即ち、研究に値する多くのテーマにもかかわらず、外部からの知的関心が十分に注がれていなかったのである。

比較教育学における戦後台湾、台湾研究における教育という二つの空白を埋めるべく着手した研究において、焦点として選択したのは、教育とナショナル・アイデンティティという主題である。1990年代の民主化・自由化後の台湾におけるナショナル・アイデンティティの変容という問題は、台湾の社会科学における中心的議題であったばかりでなく、海外から台湾に向けられる知的関心の

主要な行き先でもあったが、それは政治的・社会的問題であると同時に、教育的問題でもあった。ナショナル・アイデンティティの変容、あるいは再定義という現実、学校教育のカリキュラム、教科書の内容を劇的に変えていったからである。

代表者が本研究の申請を行ったのは、1960年代から90年代の中学校『公民と道徳』の国定教科書に表象された国家観・国民観を分析した博士論文を完成させた直後のことであった（2009年に単著書『戦後台湾教育とナショナル・アイデンティティ』として刊行）。本研究は、当該博士論文の執筆により培った台湾の学校教科書への理解を土台に、研究の発展的拡大を狙ったものだが、台湾の学校教科書とナショナル・アイデンティティという主題を継続的に追う必要があったのは、1990年代を賭して成し遂げられたカリキュラム改革（小中一貫化）と教科書制度改革（国定制から検定制への全面的な移行）を経てなお、教育されるナショナル・アイデンティティのゆらぎと、それによって引き起こされるポリティクスが収束することがなく、むしろさらなる複雑化の様相を呈していたためである。

2. 研究の目的

台湾では、1987年の長期戒厳令の解除を決定的な契機として、民主化・自由化が動き出したが、それはまた不断の流れとして今日に至る教育改革の始まりでもあった。教育改革を求める数万人規模の大デモ「四一〇教改大遊行」が決行され、行政院（内閣）の下に日本の臨時教育審議会をモデルとする専門的諮問機関「行政院教育改革審議委員会」が成立した1994年に不可逆の潮流に発展した教育改革の射程は、制度と内容の両面に及ぶ広範なものであったが、1990年代から世紀を跨ぐ形で推し進められた「教科書開放」、即ち国定制→検定制の教科書制度改革は、とりわけ象徴的な意味を持つものであった。本研究の目的は、「教科書開放」後の検定教科書が表象するナショナル・アイデンティティを実証的に分析することにある。より具体的に言えば、代表者が過去の一連の研究において描き出した教育されるナショナル・アイデンティティの「二重性」というべき現実、つまり、究極的には相互に矛盾する中国性の教育と台湾性の教育が同時並行的に行われるという現実とそれに起因する政治（ポリティクス）の今日的位相を明らかにすることである。

本研究は、代表者のこれまでの研究の延長線上にあって、それを発展・深化させるものだが、台湾の教育を論じる上で申請者がナショナル・アイデンティティの問題に焦点を当ててきたのは、国民／国家の統合が台湾教育の究極的目的であり続けてきたからにほか

ならない。即ち、戦後台湾の教育は、内外の環境の動きに応じて制度と政策を絶えず変化させてきたが、一方で「健全な国民の育成」という不変のまま中心思想として保ち続けてきたのである。2000年代の台湾では、教育されるナショナル・アイデンティティの「二重性」が半ば常態化し、教育をめぐるポリティクスの源泉となっているが、こうした状況においてなお、この中心思想それ自体が些かも揺らいでいないことは、注目すべき現実といえよう。

本研究の関心は、民主化・自由化によって上意下達の一方向的な政策決定が困難となり、国家の意思が直接的に反映することを制度的に補完してきたナショナル・カリキュラム—国定教科書—高校・大学の統一入試の三位一体が崩れた後で、この中心思想がなお有効たりえるのかという関心に導かれている。

3. 研究の方法

本研究では、民間出版社により出版される人文・社会系諸教科の小・中・高校教科書を体系的に収集し、そこに記述された国家観・国民観を詳細に分析するとともに、2000年代の検定教科書とそれ以前の国定教科書を表象するナショナル・アイデンティティという観点から比較考察する。

まず、2000年代の各出版社の検定教科書を横に比較して差異及び差異の中の共通性を見出し、かかる差異の中の共通性を前時代の国定教科書を比較することにより、教科書の記述の変化、ひいては台湾教育の変化を巨視的に把握することが本研究の方法である。

4. 研究成果

小・中・高校の人文・社会諸教科の検定教科書を体系的に収集した。具体的には、小・中学校の『国語』（中学校は『国文』、『生活』（小学校のみ）、『社会』、『芸術と人文』、高校の『国文』、『歴史』、『地理』、『公民と社会』の各教科である。学期開始時に改訂版を購入するとともに、過年度分については、必要に応じて国立編訳館教科書資料中心において複写を行った。

こうして収集した各教科各出版社の検定教科書を国家観・国民観の観点から比較し、また2000年代の検定教科書とかつての国定教科書を比較した。「小・中・高校」の「人文・社会系諸教科」という包括的・全体的な分析は現在も継続中であり、今後、段階的に論文として発表していく予定だが、従前の研究と連続性が高い国民中学『社会』教科書の分析については、その成果の一部を日本国際教育学会第19回大会（2008年）、同第20回大会（2009年）で発表したほか、日本貿易振興機構アジア経済研究所「台湾総合研究Ⅲ—社会の求心力と遠心力」の研究会においても、

関連する発表を行った。当初の予定よりも分析に時間を要しているのは、研究を進める中で、2000年代の検定教科書の出版社間比較をより意味のあるものとするためには、現在の検定教科書を過去の国定教科書とを比較し、より広いスパンで変化のダイナミクスを把握すべきことが明らかになったためである。既に行った中学校『社会』教科書に関する発表では、教科書分析の方法の洗練を図る一方、(1)台湾社会のエスニック的・文化的多様性、(2)自文化と他文化の境界、(3)中華人民共和国との関係という三つの観点から教科書を短期的(2000年代検定教科書の出版社間比較＝横軸の比較)・長期的(2000年代の検定教科書と1968年以来の6期の国定教科書との比較)に比較し、内容の変化と不変を明らかにしている。

3年間の研究を通じて、従来の台湾教科書研究の射程を対象とする教育段階・教科数(中学校の公民教育・歴史教育から小・中・高校の人文・社会系諸教科へ)と対象時期(1960年代から90年代の国定教科書時期と2000年代の検定教科書時期を架橋)の両面で拡大し、方法の面でも洗練を図ることができただけでなく、いくつかの副次的問題意識の派生によって、研究の幅を押し広げることができたものと思われる。

第一に、教科書と密接な関連にある教育課程について、従来の中学校カリキュラムへの理解を土台として、それを上下に拡張する機会を得た。即ち、本研究を通じて、小学校と高校のカリキュラムに対する理解を深めることが可能となったわけだが、その成果は、国立教育政策研究所「教育課程の編成に関する基礎的研究」の報告書に寄せた台湾の学校教育課程に関する論考に反映されている。

第二に、教科書分析の観点の多様化があり、例えば5に挙げた高校(普通高級中学と高級職業学校)の『生涯規画(Career Planning)』教科書に関する論考は、本研究で確立した方法を国家観・国民観とは異なる観点の分析に援用したものである。

第三に、台湾の教科書内容をめぐる論争が台湾社会にとどまらず、中台関係の争点ともなることから、中台関係研究における教育・文化的側面の重要性という認識を得た。即ち、中台関係では従来、派政治的・経済的・安全保障的側面のみが論じられがちであったが教科書の内容をめぐるポリティクスを始め、中台間の教育・文化面における相互関係への理解を深めてきた。例えば、『海外事情』第57巻第1号所載の論文「馬英九政権の教育政策と中台関係」、日本台湾学会第12回学術大会における発表「馬英九の高等教育政策と中台関係」は、こうした問題意識に基づく研究の成果である。

第四に、従前の教科書内容をめぐる論争に

加え、2000年代の教科書制度をめぐる論争の研究を加味したことにより、研究の複眼化が図られ、台湾の教科書論争に対するより深い理解を得た。『比較教育学研究』第42号所載の論文「台湾における教科書検定制度の定着をめぐる諸問題—2000年代の揺り戻しの動きに注目して—」で論じたように、教科書の制度をめぐる論争は、畢竟、教科書の内容をめぐる論争とわかちがたく結びついており、両者は全体性の中で理解すべきものであることが明らかになった。同時に、「台湾教育における多様性の定着(consolidation)」という新たなテーマの着想が得られた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ① 山崎直也、台湾、諸外国における教育課程の基準、査読無、2011、pp.121-129
- ② 山崎直也、台湾における教科書検定制度の定着をめぐる諸問題—2000年代の揺り戻しの動きに注目して—、比較教育学研究、査読有、42号、2011、pp.42-59
- ③ 山崎直也、台湾におけるキャリア教育—『生涯規画(Career Planning)』教科書を中心に、『諸外国におけるキャリア教育』(平成21年度調査研究等特別推進経費調査研究報告書)、査読無、2010、pp.175-184
- ④ 山崎直也、馬英九政権の教育政策と中台関係、海外事情、査読無、第57巻第1号、2009、pp.60-72

[学会発表] (計5件)

- ① 山崎直也、台湾における教育の自由化・多元化をめぐる葛藤—教科書制度を中心に—、日本比較教育学会第46回大会、2010年6月27日、神戸大学
- ② 山崎直也、馬英九の高等教育政策と中台関係、日本台湾学会第12回学術大会、2010年5月29日、北海道大学
- ③ 山崎直也、台湾における集成的アイデンティティの多重性と学校教科書—国民中学社会系教科書の長期的・短期的比較—、日本国際教育学会第20回大会、2009年9月20日、東京外国語大学
- ④ 山崎直也、台湾の検定教科書にみるナショナル・アイデンティティ—国民中学『社会』教科書を中心に—、日本国際教育学会

第 19 回大会、2008 年 11 月 16 日、早稲田
大学

- ⑤ 山崎直也、台湾における中等教育の多様
化、日本比較教育学会第 44 回大会、2008
年 6 月 28 日、東北大学

[図書] (計 1 件)

- ① 山崎直也、東信堂、戦後台湾教育とナシ
ョナル・アイデンティティ、2009、285

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山崎 直也 (YAMAZAKI NAOYA)

国際教養大学・国際教養学部・助教

研究者番号：10404857